

D H. Lawrence の中だるみ

—*The Princess* を借りて—

打木城太郎

目次

- §…1… 序としての大まかな連山縦走……………[p. 37]
- §…2… *The Princess* の形態学抄……………[p. 42]
- §…3… 結びとしての生理学……………[p. 49]

§…1… 序としてのおおまかな連山縦走

1885年(明治18年)から1930年(昭和5年)までの、わずか45年の生涯にしては、そして、10代で気管支を痛め、その後ずっと病弱のまま、しかも死んだ原因が肺結核による激症肝炎であったような男にしては、量的に見て、大作家の部類に入る。

今日では、質から言っても、世にも大変な作家であるということになっている。

大変なと言ったが、どう大変なのか、具体的に述べるとなると、これまた、大変な仕事である。ここでは、だから、例えば、*Women in Love* の一読をおすすめするだけにしよう。これを一つ読めば、まず、まあ、大変の意味が、(意識では把握しきれないにしても)太陽神経叢あたりに、ピンと来る筈だ。ピンと来ない人には、この際、御縁がないとしか申し上げようがない。

そもそも、彼の作家魂の歩みは、その母親のすさまじい抱擁からの脱出に始まった。

1911年1月、母親が悪性腫瘍で死ぬと、つまり、彼、やっと、26才で一人前になる可能性を掴んだわけだが、翌年の春には、もう、こともあろうに、4才年上の三人子持ちの人妻、しかもドイツ人の、それも貴族出の女に惚れた。

女がまた、無類強靱な自我の持ち主で、この卑賤・眇たる坑夫の悴を受け容れたのである。二人は万障を乗り越えて行く覚悟を(外から見た限りでは)あっさり決め、手を取りあって英国を去った。これで男が一人前になれなかった

としたら、この世に信ずべき法則など何もないことになる。

2年後には帰英して正式に結婚、しかし、おりしも、第一次大戦が始まると、妻がドイツ人であるというだけのことで、スパイ扱いを受け、世間から村八分にされてしまった。

これで作家の見えざるを見る眼と^{あば}発くあたわざるを^{あば}発く牙が研ぎ澄まされなければどうかしている。1911年(明治44年)頃から1916年(大正5年)にかけてものされた *Sons and Lovers*, *The Rainbow*, *Women in Love*……これらは山ならば、とりあえず、岳神の傑作・穂高・槍とでも言うべきものだろう。

槍を馳けおり北西へ向かえば、双六・三岐蓮華・黒部五郎・薬師と、しばらくは、踏み心地、必ずしも峨々とはしていない。同様にロレンス連峯も、H. T. Moore に言わせれば、*Women in Love* 以後は、学びのすすめ的な仕事——*Education of the People* だとか *Studies in Classic American Literature*——など、必ずしも冴えぬ(というより、むしろ)不毛の数年が続くのである。彼自身、大戦終熄とともに、問題の半身フリーダを伴い、イタリヤへ流れ、フィレンツェ、カプリ、シシリ、さらにバーデンバーデン、サルジニア、セイロン、オーストラリヤ、ニュージーランド、タヒチ、サンフランシスコ、ニューメキシコ、メキシコ、そしてまたイタリヤ、フランス等々、と、まあ、旅から旅への生活が、1930年(昭和5年)南仏・ヴァンスの陋巷にのたれ死ぬまで続くのだから、一応、落ちつかぬ生活、不毛の生活と見られてもやむを得まい。

ところで、日本アルプスも、北端に及んで、突如、^{つるぎ}剣・鹿島槍など、峨々たる峻峯が出現し、岩登りに憑かれた輩を感泣させるのであるが、これに似て、ロレンス連山も亦、末に到って *The Plumed Serpent*, *Lady Chatterley's Lover* なる巨大な山塊が膨隆屹立し、そして突然、神の斧に断たれた如く、*The Man Who Died* という^{くろがね}黒鉄の絶壁をもって尽きるのである。

ロッククライマーあるいは山岳写真家から見れば、つまり山容巖貌中心の形態学からすれば、なるほど日本アルプスには中たるみが在ると言える。しかし、これを、生理学的に見れば、つまり地球考古学的・地質学的に見るならば、中たるみというようなことのあるう筈がない。ロレンス連山にしたところで、生理学的に眺めれば、すべて、歩き甲斐のある山波なのである。眇たる坑夫の小悴の魂が、そのおいたちの20余星霜を通して嘗めた欲求不満を吐き出した初期の作品群中最大最高の山塊が *Sons and Lovers*。そしてここまでできあがった彼の魂という地球が、天意の軌道をひた走る途次、フリーダとの恋つまり(ロレンス自身の観照によれば *The neutral intention of Otherness* とでも言うべ

き) 天のしかけた毘に陥ちたということは、生まれつき偏屈な彼がさらに限定された軌道を選んだことを意味している。

したがって、人類は、*The Rainbow*, *Women in Love*, なる巨大にして霊妙きわまりない巖相を帯びた褶曲の産物を、(二つも!) 手に入れ得たという次第なのである。

この辺までは、ロレンス、人間個人を充足する筈の人間関係など有り得ぬと直観し、これを前提としながらも、なお、不敵に、人間関係の理想的パターン制作に彫琢を凝らしている。彼は男だから、そして男は理性的で単純だから、当然、およそ法則的に把握しがたい女の性の秘密さがを発くことに余念がない。男の自我と女の自我が、どのように噛み合った時、その結合は有機的なそれとなり、新しい生命を獲得し、しかも当事者達の生物的寿命に照応する時間を長らえ得るか——それを明らかにしようと狙っているわけだ。

したがって、ここまでのロレンス文学は、絵空事ではない。哲学的に未完成ではあるにしても、それゆえにこそ、現実を踏まえている。

なるほど、ロレンス以前の古典文学に慣れた人々の眼には、*The Rainbow*, *Women in Love*, にして、もはや、スールレアリスムに見えるだろう。登場人物達に首尾一貫した堅牢な性格がうかがえず、彼等の行動の論理の曲折がいちいち滅茶苦茶で、正直につきあっていれば腹がたってくるかもしれぬ。しかし、これは、人々が長いこと、ダイヤをダイヤと眺めることに慣らされ、石炭を石炭として疑わずに来たせいなのだ。ところが近世、化学を学んだ者にとって、ダイヤモンドは畢竟何であるか。石炭は、つまるところ、何であろうか。等しく、炭素という元素なのである。だから、ロレンスの化学者式論理の法則さえ呑みこめれば、さしも謎に満ちた登場人物達の(性格とは言えぬような)性格も、一つ一つ、実は炭素の次元において、やはり首尾一貫した堅牢なそれとして浮き彫りされていることに、人々は気付く筈なのである。そして、その限りにおいて、これ等の作品は、絵空事ではない。哲学体系という観点からでは未完成であるにしても、サイコロジスト化学者にとっての現実という大地を、あくまで踏まえてはいるのである。

ところが、長篇小説としての絶筆・*Lady-Chatterley's Lover*, あるいは小説としての絶筆・*The Man Who Died* となると、これは、絵空事のそしりをまぬがれぬかもしれないのだな。

ロレンスの哲学体系が煮詰った時、必然的に、強引に、理想家的に捏造された人間関係の理想型——そうとしか言えないような代物しろものが想念の空間に、ヒステリックほの

かに浮かんでいる。それも、見える者にしか見えぬ——男女の自我が、本当に研ぎ澄まされ孤独に徹しきった時、はじめて、ちょうど二個の星のように均衡を保ち得、離れるでもなく、密着するでもなく、それぞれの軌道を回りながら、しかも相いたずさえ、厳として一者たるの存在を主張できる——などと言ったら、これは、単なる言葉の遊びとして葬られてしまってもしょうのないところかもしれない。

しかし、普通に愛といわれているものが、分析化学的に考えてゆくと、実は所有欲・支配欲じみた自我の業念ごうねん—執着—に他ならぬことが判ってしまうわけで、ロレンスならずとも、二者の調和・密着が成立するためにはその調和・密着と同程度の隔絶が必要であると知る。しかも、それは、tenderness という電荷を中心に置いてのことならば、必ずしもたわことではないと思えるのである。ちょうど、陽子の周囲を回る二個の電子が、(二つあいまって、はじめて) ヘリウム原子一個を成立せしめるように、人間存在の新しい生命の単位も、自己中心的にして気まぐれな感傷的なそれではない tenderness を中心に男女の自我がついで一対になり得た時、はじめて成立するという論法——これ、あながち、牽強付会けんきょうふかいと片付けられぬふしがあるのである。

生物体は、他物と接触せず、孤立していないとその生命が保てない。と同時に、他物に接して同化作用アッサミレーションを営まずにいれば、枯死してしまう。

人間の自我というやつも、根元的に見て、——孤立によりその生命を保たねばならないし、同時に他者との接触・同化作用を通じてそれぞれ生命を更新しなければならぬという——、悲しい宿命を負っているものらしい。

孤立と融合を同一平面上において重ねあわせようとして悪戦苦闘したのが、つまり、白人同志の間に自我の結合が可能かどうかを、(駄目と知りつつ、不敵にも) 探求したのが *The Rainbow*, *Women in Love* であった。そして、*Lady Chatterley's Lover* にいたると、白人同志ながら、貴族の女と森番という設定、*The Man Who Died* は神話じみた(妖怪空間における)実話とでも言うべき、ローマ人に迫害されて、一たん死んだ男と蓮のような隠忍の女の真に生きての成仏の話だ。いずれも、人間否定以後の人間の、陽子デンダーネスを中にはさんでの、平面歪曲による二者合一の図である。強引な理想実現例と言いたくなるのは筆者のみではあるまい。

ところで、ロレンス、『チャタレイ』の前の長篇 *The Plumed Serpent* では、白人女の分化せる自我をして、メキシコ男の未発達なエネルギー(それも、放電しないでただ溜められているだけの潜勢的なそれ)の前に、狼狽・振動せし

めているんだな。ロレンスが、たまたまメキシコに旅したからメキシコ物を書いた、などと考えるはいけない理由がここにある。白人は意識が分化していて自主独往の自由な自我という牢獄の中に閉じ込められた魂なのに、古代アステク族の血が今なお脈打っているメキシコ人の未分化な自我は巨大な蛇のように限定されていて、不自由で、そのくせ、宇宙と通うそれであり、牢獄的自我とは正反対なものである。このなまなましい、limitedであるが故に天空開豁なメキシコの霊と、己の過去の牢固たる自我との間を、白人女の魂は、振子のように往復し去就に迷うわけである。

ロレンスにとって、古代人は、その意識の未分化と異教故に魅力あふれる存在だった。白人の意識分化は、毒ある小蛇がうようよしている図を想起させる。これに対し、古代人の意識未分化は一匹の『竜』を感じさせることになる。まこと、古代人の Libido たるや、例の、人類最古の象徴『竜』を産んだのも、むべなることと言ふべきものがあった。しかも異教こそ、当然、竜を抱く堂塔伽藍として恰好この上ない。そして、愛の意識が先行する御用神学上のキリスト教——神学者達や牧師達とんやによってきりきざまれ、すでに神そのものは死んでしまった、観念的な、倫理的な、使命観で飽和した俗流キリスト教——が、何と、小毒蛇がうようよしているというイメージにぴったり来ることか。

ロレンスは考えた。個人が個人を愛することはもちろん至難の業ではあるが、とにかく、それが可能であるにしても、愛する主体—自我—がちゃんとしていなくては話にならない。しかるに、近代ヨーロッパにあっては、人は皆、(民主主義者故に) 理知的であり、(キリスト教徒故に) 精神的である。これでは、人間、真に強靱な自我を持った個人じゃなくて、断片だわい。

民主主義者は神のかわりに人間の理性を信ずる故に非宗教的魂であり、しかも俗流キリスト者ときているのだからその肉体は当然四月迄保存された蜜柑のように水気が失せている。

かかるかさかさした断片が御同様なる断片に出合っても、その二者の間に愛が生じ得るわけがない。密着などある筈がない。同化による生命更新がもたらされることなど、とうていあり得ない。

しかし、蒙昧の古代人なら、潜勢力に満ちた古代異教の徒なら、海綿動物ポリフェラが海水を己の体液としてそれぞれ一者でありながら他者すべてと通じているように、意識以前の愛つまり文句なしの一体感を恣にしていたのではあるまいか。そうに違いない。

こんな想念をもとにして、ロレンスは、W. Y. Tindall がほめちぎり、しこう

して F. R. Leavis が (馬鹿臭くてか骨が折れてか、とにかく読破しきれなかった) 長篇小説 *The Plumed Serpent* を書いたのであった。

ロレンス自身、一個の人間として、孤立していないと死んでしまいそうであった。が、同時に、同朋と結合して生きてたくて耐らなかつたようである。時には、俗世間と相いたずさえて生きることが、sex 以上に深刻な本能的欲求だとさえ自覚したらしい。二長篇 *Kangaroo*, *Aaron's Rod* などは、そうした心情が動機となって書かれたと見てよい。単に政治意識や、指導者の重要性などという観念が先行して、それで小説をものするような体質の男では、彼、断じてなかつたのだから。

どうやら、この小論の本題に入り得るところまで来たようである。つまり、ロレンスは、生涯、自我同志の孤立・融合問題に悩まされていたということを前提に、今回は、メキシコ男と白人女が噛み合った小篇をいじってみる——その準備ができたと言いたいのである。

§…2… *The Princess* の形態学抄

筆者の手元にあるのは、Viking Press : New York の *The Complete Short Stories* で、その第二巻の p. 473 から p. 512 にかけて、これはおさまっている。つまり、まる 40 頁の短篇である。小節など設けられておらず、一気に読んでもらおう式になっている。

1924 年 (大正 13 年) 8 月、New Mexico の San Cristobal において書きあげられたそうだ。発表されたのは、*The Calendar of Modern Letters* 誌上で、1925 年 (大正 14 年) の 3 月、4 月、5 月の三回にわけてのことであったという。

ロレンスは 1922 年の秋 Taos で 3 カ月ばかり過ごしており、翌々年の夏、再び New Mexico を訪れている。二度目には、フリーダの他に、女流画家 Dorothy Brett なる変り者も伴っており、ここに激烈なごたごたが展開したわけであるが、その舞台となった Del Monte Ranch (タオスから 17 哩、海拔約 3000 米) の寄贈者 Mabel Dodge Luhan (42 才) もこれまた、海千山千の女であり、(ただ農場を呉れるわけがない) 三匹の女怪にこずきまわされては、ロレンスも参ったことだろう。しかも、その血みどろの戦いの底流に、ロレンスの感覚を甘くくすぐる何かがあったとすれば…… (これはいけない。これは形態学の領域を逸脱してしまうところであった。)

10 月には、Mexico の Oaxaca へ移って、一息つき、短篇 *The Woman Who*

Rode Away を完成し、かつ、二年越しの大長篇 *The Plumed Serpent* の完結を急ぐことになった。

The Princess はこの 10 月移動にさき立つこと 2 カ月つまり 1924 年 8 月において激闘の高地・デルモンテ農場に対して、ちょうど派遣軍の本営に当たると思われるサンクリストバルで脱稿されていることを覚えておこう。

The Plumed Serpent は 40 才の白人女の牢固たる自我がメキシコの地の靈—『竜』—の化身とも言える男と噛み合って、その意識の分化による自主独往の自由なる——牢獄のごとき——自我の殻が破れんとして破れず、破れそうもなく破れてしまう——みたいな話である。これの祖型とも言うべき *The Woman Who Rode Away* の方には、そういう含蓄はない。白人の良人との暮らしに飽いた（と言っても、良人を取り替えればそれでよいのかというとは決してそうではなくて、本質的に白人生活に耐えられなくなったという意味で）駄目になった 33 才の女が、古代アステク民族の靈がその血に生き残っている山岳種族チルチーインディアンのもとへ、独り、馬に乗って乗り込み、納得ずくで、陶酔のうちに、咽をかつ切られ、羊よろしく、神への犠牲に供せられるという話である。ただし、これが陳腐なマゾヒズムとして感じられないのは、つまりわれわれ健全な普通人に病的な頹廢を感じさせないのは、ロレンスが、文明人・白人こそ頹廢の中にあり、馬で去った女は（馬とは、ロレンスの場合、あまりにも有名な、生命力の象徴であることを思い出して頂きたい。）実は、健全への旅人ロマンティストなのだと考え、それを、彼独特な言語駆使能力をとおして、上手に表現しているからなのである。

それにしても、その構成たるや、一見、およそ、^{きよく}曲がない。（筆者は、この作品は構成的に見ても決して失敗作だとか、駄作だとか、そういうふうには思わない。それどころか、通念的な、起承転結の見事な、手際のよい短篇などおよびもつかぬ、別の類型に入るべき傑作と考えている。）

それにしても、曲がない。ロレンスの短篇は、まったく、往々にして、一見曲がない。

ところが、*The Princess* ときたら、ロレンスを S. モームみたいな職人とくらべて技術的に幼稚とする人々に、つきつけてやりたいほど、上手に仕上がっているのである。

筆者をして勝手に小節を設けしむれば、第 1 章は p. 473 の始まりから p. 479 の終りまでの、まる 7 頁ということになる。ここには、Dollie Urquhart なる女が父親から特殊な血液と教育をさずけられ 38 才になるまで（全面的と言って

もよいほどの影響を受けつつ)二人で暮らした話が書かれてある。

特殊な血液というのは、父親 Colin が自称するスコットランドの王族の血というやつで、筆者の見るところ、重要なのは、怪しげな王族の血脈自体より、むしろ、それを自称する意欲——偏執狂的素質——の方である。彼は、娘が生まれると、最初からこれを My Princess と呼び、絶対に Dollie などとは呼ばなかったという。(特殊教育の始まりである。)もともと病弱だった母親は、Princess が2才の時死んだ。(これで、父親の特殊教育は徹底することになったわけだ。)父と娘は絶えずヨーロッパを旅行し、ただお金を使い、他人と社交をするだけの生活を続ける。それでいて、健全な俗人とは考えることが少し違っている。『世間の人々にかかわりあうなかれ。彼等は自分達の言行をしかとは意識していないのだ。人間、誰でも、嫉妬深い悪魔が宿っていて、こいつがいろいろわるさをやらかす。つまり、我^がという奴さ。そして、魔王の宿っている人間もあるわけだが、実際には、そういった魔物の王族を抱く人間としては現代では私達だけが残っているに過ぎない。しかし、このことは秘密にしておくこと。いいかね、そこいらの輩^{やから}にわれわれが古い王族の血筋と知られたら、殺されるからね。とにかく、しらばっくれて、人々には丁寧に、やさしく……。』

こんな風に、父に叩かれ叩かれ、父以外の人間には親しまず、無口で、一見素朴で、優しく、礼儀正しく、Princess は育っていった。水晶のように明澄で垢抜けしているお化けだな。

十代で、Zola, Maupassant を読み、しかうして Zola や Maupassant の眼で Paris を眺めた。ついで、Tolstoi や Dostoevsky を読んだが、Dostoevsky で脳が困乱したという。(当り前である。)

彼等はやがて、親戚の遺産を相続する条件をみたすため、アメリカに移った。アメリカ内の旅は自由に許されていたから五大湖地方、カリフォルニヤ、南西部へとおもむいた。気散じとして、父は詩を書き、娘は絵を画いたというが、ひどい話である。ロレンスが、しらばっくれて、彼の信念からみでの典型的な死人達を描いていることをここらで意識しておこう。

死人ほど才たけているものだ。一見か細いけれど Princess, きついことといったらない。乗馬をおぼえたんだな。父と遠乗りに出かけて、どんなに困憊^{こんぱい}しても音をあげることなく、松の葉をベッドに、嬉々として毛布にくるまって眠るなど、自意識にのっとり己の役を見事に果たしていたそうさ。

彼女、25 才になり、30 才になっても、あい変らず優雅で清純で、冷静で意識的で、完全に intact であったという。(intact……どう言ったらよいであろう。他

人、特に男性の手に触れられたことがないという意味ではあろうが、さらに、彼女自身の中に、普通人のお金を稼ぐ苦勞、つまり、生きる苦勞及び必然的に反面の生き甲斐・充実感といったものが無く、又、^{メイト}棒組としての男性を仮想し、これに対する媚つまり支配欲を抱くなどという心根が存在しないということ——無色透明・滅菌蒸溜水みたいな状態——をも併せ考えたいところである。

この 33 才で 23 才に見えたという彼女の intact な像が読者の頭の中に定着したところで、筆者による区分・第 1 章は終る。

第 2 章は、p. 480 から p. 488 の 23 行目までの約 9 頁である。

Princess, 38 才の時、父が死んで解放された。憑きものが落ちたわけだ。が、これは同時に、彼女をくるんでいた一さいのものの蒸発をも意味していた。半分途方にくれながらも、彼女、ヨーロッパへ戻る気はしなかったという。父の晩年を看護したカミンズという女をつれて Princess, とにかく、結果として、New Mexico へやって来た。Rancho del Cerro Gordo なる山岳農場に着いたのは 8 月の末だった。コック付きの一戸建ての家を借りたけれど、食事は付近の高級ホテルで食べることにした。(その理由がふるっている。) Princess, 結婚の相手を物色する気であったのだそう。ただし、これは、もちろん、脈々たる血潮の叫びとしての『男欲しや』の情からではなく、彼女独特の意志、抽象としての『結婚』への意志つまり、意識に端を発した(自然発生的なそれではない)さもしさからのことであった。

彼女は、金持ちのユダヤ人達と語り、画家達とともに絵を描き、大学生達と馬を駆った。大体、快的な日々であったが、何か不足がなかった。『結婚』。抽象としてのそれは、しかし、どの連中といっても、具体化しないのであった。離れたところから見て彼女の清楚な美貌に惚れた男はかなりいたけれど、いずれも近寄って来てからは、彼女の眼の中のガラス細片かけのようなあざけりのいろに耐えられず、くどくことを御遠慮申し上げたという。

ところが、ここに、彼女と対決し得た男が一人在った。Domingo Romero という案内人ガイドである。彼は白人が入殖して来たために亡んだ名門の末裔であり、年齢の頃は 30 才あまり、メキシコ人の特徴をいかにそなえていた。曰く強壯で後姿は美しく、手足はしなやか、面長でその表情は重厚で嶮しく、死か然らずんば激情へという暗い眼をしていたわけである。実際、その眼の静謐な絶望とでも言うべき暗黒の中に時々メラと燃える火は、やがて Princess の (反撥を含めての) 興味をそそることとなったのであった。

釣や山岳地帯への遠乗りに行く時、Princess は Romero を必ず案内人として

つれていくようになった。

「見かけるのはリスのたぐい、スカンク、針ねずみ、……つまらないわ。鹿や熊やアメリカライオンはどうしたの！」

「山奥へ入って行って、じっと待つか、どこまでも足跡を追うかすれば見られますよ。」

「じゃ、つれていきなさいよ。」

「今頃山の上は、日が落ちると凄く寒いですよ。だから、私の持つてる小屋に泊りましょう。一泊すれば、きっと、おのぞみの何かが見られます。小屋の裏手に雪解けの水が注いで来る池があるのです。この前なんか、鹿が三頭、水を飲みに来てました。」

こんな次第で計画がねられ、10月はじめの月曜日に、ロッキー山脈への挑戦が敢行されることになった。

以上で、筆者による区分・第2章は終る。ここでは、メキシコの地の霊の化身としての Romero が筆者の手などではとうてい伝えきれぬほどに活写されていることを強調しておく。しかも、これは、第一章で描き尽くされた Princess なる性格と、この Romero の未分化な生ま生ましい潜勢力に満ちた存在が手を取りあって一つの畏へと陥ちてゆく——その序曲でもあるということを意識しておきたいところである。

第3章は p. 488 の 24 行から p. 500 の 6 行目迄とする。文字面を追っていく限り、これは、美しくもすさまじいロッキー山塊への騎馬旅行の風物詩である。大町桂月のそれと、本質的には似かよったものが、一見、在ると言えそうだが、中に、カミンズ嬢が、(あまりに険悪にして凄惨な道のため馬が足を痛め血を流すのを見て)ヒステリーを起こし、里へひきかえすという一こまがあって、甚だ怪しいものにせよまあ科学と言えそうな小説作法上の急所の端的な例を示している。カミンズが随伴すればこそ、Romero を案内人として、Princess、出発できたのであり、カミンズが引き返していくからこそ(いなくなればこそ)次にくる第4章において、Romero の自己主張と Princess のそれとが心おきなく激突し得ることになるのであり、さらに、カミンズ嬢が里に独りで帰ったればこそ、(林務官が二人、Princess を探しにやって来て)この小説を小説たらしむる破局が成立するというわけなのである。

なお、この章を通じて、読者は、知らず知らず、Princess の肉体に、己の感覚を投入し、彼女と同様に疲労困憊し、冷えきり、意識朦朧となり、ロッキーの山ふところの薄い陽差しを、如実に浴びたり、日蔭に陥ち込んだりするよう

になるのである。そして、そのことが、第4章に対してこの第3章の持つ一番大切な意味、と言うか、一機能一なのかも知れない。

とにかく、この章では、悪路つまり大自然との悪戦苦闘が Romero と Princess の血の流れを近づけ過ぎたということを、意識しておこう。

第4章は、したがって、p. 500 の7行目から末尾 p. 512 の22行迄ということになる。

困憊の果てにたどりついた小屋は、小屋とは名のみの、獣の巢のように小さくてむさくるしいものであった。こわれた屋根には赤針縦の大枝をのせ、かろうじて雨露をしのげるようにしてあり、寝棚は一人前しかなく、土間には丸太のころが三つ置いてある。これが椅子がわりで、炉が一カ所、他に余分の空間は存在しないのであった。

日暮れ時、池で鍋を洗っていると、闇に光る野獣の眼を見た。大山猫であった。氷のように無心なものおじしない電磁波のような視線に射すくめられ、Princess は、『野生』の持つ排他性——人間を寄せつけぬ精神——みたいなものが骨身にしみたという。

その夜、Romero と Princess は、互いに近々と身を置きながらも、遠いところに存在しあっていた。ぎごちなく、食事をすませた。夜がふけるにつれ、しんと冷えて来た。寝棚に寝て毛布にくるまっても、雪中に埋葬されるかのように、寒気にしびれ、しかも苦痛にさいなまれるのであった。一方、男は、土間にごろ寝しているにも拘らず、すやすや眠っていた。

Princess は、先ず、単に物理的な肉体の暖^{だん}をとりたかった。だがそれは保護を求める(女らしい)気分の原葉体^{げんえたい}というか、幼虫^{ちゅうちゅう}というか、そんな本質の願望を秘めている欲求であった。自意識の殻を脱出したかった。しかし、同時に、彼女は、もっと深い、存在の根元^{ねもと}みたいなところから、己を intact なままに保っておきたかった。何人^{なんびと}といえども、彼女に対して力を、権力を振うことは、許されない。どんな男に対しても、彼女を**所有する権利**を与えてはならない。——というのだから、これは恐い。ガラス細片^{かき}の女。筆者の区分による第1章で、この物語の筋書とは一見関係のない父親の性格及びその娘への血液の伝承、そして徹底的特殊教育が、なぜ長々と、くわしく物語られていたか、やはり、ゆえなきことではなかったのだ。人間は神から与えられた『自然』つまり本能を、『意識』というこれまたもともと神から与えられた生活用の武器で圧伏し、意識で鍛えられ培われた第二の本能とも言うべき感覚を、そもそもの本能より強烈なものとして振りかざす場合がある。近代人の身にふりかかっている病弊の本質は、これではあるまいか。さて、それはともかく

として、この小説作成に於けるロレンスの意図が、Princess という女の抱く特殊鋼的・ガラス細片的自我の犯した殺戮行に在ったとすれば、第一章は、まこと、必要な、序としての鍛刀物語、一種異様な Bildungsroman として受け容れられるべきものなのである。

「ロメロ、寒いのよ。」

闇の中で、遂にしかけたのは彼女であった。Romero は一声で飛び起きた。

「あたたためて欲しいのか？」

「そうよ。」

男は彼女を抱いた。途端に彼女は、『触らないで！』と叫びたかった。あやうく、体をこわばらせ、それをこらえた。

男はあたたかかった。しかし、それを、Princess は、恐ろしい獣のあたたかみと受けとる。したがって、抱いてくれている男が彼女の存在を抹殺する不倶戴天の仇でしかないのである。

男は、当然、欲望に燃えた。そして、この夜に限って、彼女は、自分で招いたことだからとあきらめ、人形のように、されるがままになった。

翌朝、男は、(お人好にも)はればれとしている。ところが彼女の方は、もはや、鋼のように冷えきっているのであった。(この辺が、『チャタレイ』のメラーズとコニイの関係などと全々違うところだな。)

「昨夜のことが気に入らないのか？」

「そうよ。あたりまえでしょ？ あなた、気に入ってでもいるの？」

ひどい応待があったものである。Romero は激怒した。

里へ帰る、帰さんぞ、で二人は完全に毒気もうもうの関係になってしまう。とうとう、Romero は、Princess をひんむいた。御念がいったことに、乗馬ズボン、上着、ブラウスなど、そっくり、池へ沈めてしまうのである。

かくて、毎日毎晩、褐色の野蕃人が白い女体を犯すわけだが、この心像風景、読者の脳の表層においてこそ、まさに、あられもないものであり、『野獣の暴戾』^{ぼうれい}という観念をよびさますものであるけれど、実はむしろ根限り挑みながらも歯がたたず、泣きべそをかいているのは Romero であり、白人女の方は、物理的にこそ、ぼろきれのように汚されながら、精神は冷酷非情、徹底的に、頑強に、相手の存在を否定し続ける——という感じが、そくそくと迫ってくるのだから恐ろしい。

日がたつにつれて、彼女の願いはただ一つ、intact でありたい——という形で結晶した。intact であることへの意志の権化。

とうとう、森林監督官が二人、Princess を探しにやって来た。かわいそうに

Romero は射殺された。

里へ帰って二週間もすると、Princess は恢復し、カミズ嬢をつれて東へ発った。

Romero という存在は、人々の記憶の中で土くれ同然、無に帰した。彼女は後年、初老の男と結婚し、しあわせげに見えたという——のであるが、これも、「以前、山奥で、ある男が気が狂い、下から私を狙って鉄砲をうちましてねえ、そしたら、馬に当って……私の案内人がとうとうその気違いを射殺したのですけれど……それ以来、私、めっきり気が弱くなってしまいました……」

というせりふからすれば（どうせ、intact なまままでいられるような亭主を選んだのであろうが）彼女の特殊鋼的自我が、intact なまま、どれほど、色浅せてしまったかを示す言葉に他ならないだろう。そして、これがこの小説の結びなのだから、まったく考えさせられてしまう。

§…3… 結びとしての生理学

ロレンスにとっての『真実』と『嘘』は、彼の太陽神経叢（みぞおち）にピンと来るか来ないかで測られるのであった。彼のみぞおちの検査に合格した真実だけが、彼にとっては、生命のある事柄であった。抽象的な知識などは、つまり、大脳作用の領域に属する客観的普遍的真理などは、みぞおちにピンと来ない限り、信用しなかった。ロレンスは、少なくとも、そういう顔で、自己主張をやったのであった。

当然、抽象的な、客観的な知識が勝利をおさめた近代において、彼、すね者たらざるを得なかった。

近代機械文明の進歩など、人類がそれに乗って地獄へ驀進してゆく交通機関の発達としてしか、彼の眼には映じなかった。

地獄と言っても、具体的には、さまざまな相がある。ロレンスが一番こだわったのは、人間がお化けになってしまうことについてであった。意識が分化・発達したあまり、理屈さえとおれば正義あるいは善なりと頭できめてしまい、次いでそれを五体全部が信じ込んでしまう non-spontaneity 傾向——つまり、観念を食べて、それがあたかも豚肉やじゃがいもの如く美味であり栄養に富んでいると、真底、感じてしまう人間がいるとしたら——これはお化けである。

意識が細分化すると、人間は、強靱な自我を失い、したがって、他人を愛せなくなる。感傷的な所有欲乃至被所有欲をもってしか、他人と接触できなくなる。こういう人間を、ロレンスは断片と呼んだ。真の個人なら自我がある筈だ。

自我さえしっかりしていれば、真に孤立し得、かつ、真に、そういう者同志、接触し得る筈だと考えた。だが、断片達では、真に孤独な己を保てないし、そのくせ、真に他人と結びつくこともできないのである。

現代は、人間関係に関して不毛の時代である——とすれば、ロレンスは、不毛の大地に挑む百姓だな。

機械文明・民主主義・俗流キリスト教は、人類の頭脳が産んだ三大怪獣であり、これが三者一体となって、産みの親たる人類を、バラバラにしてしまった。断片にしてしまった。少なくとも、北海の氷結の神秘から生まれて来た白人主流派は、おおむね、駄目になっている。

ロレンスは、その初期において現代の白人同志の調和密着を図り、あれこれ工夫した。つまり真の自我の確立を唱導したのである。(ただし、これはどのケースも成功していない。)

後期にあっては、彼、現代の白人同志には違いないが、職業的に原始人に近いと考えられる森番と貴族(面白いことに、森番に内面の気高さを与え、貴族の方に庶民的・肉体的豊かさを与えている。)とか、ローマ時代の卑しい新興宗教の教祖にアントニオかなんかに乙女時代蓄を散らされた陰気で隠忍極まりない下級軍人の娘の後身を配したカップルを造り、これらにそれぞれ、しかくあるべき真の自我を体現させ、しこうして調和密着の理想型を描いてみせた。

(初期の作品・*The Rainbow*, *Women in Love* は、真我の確立による人間関係樹立が失敗に終わったため、ロレンスをさして、今世紀最大の作家と呼ぶ者が出てくるほどに意義深い傑作となった。一方、後期の *Chatterley*, *The Man Who Died* は、真我の確立及び人間充足・調和密着が成功したために、意識先行による観念的作品とのそしりを受けたりしている始末だ。)

筆者はここに、人間同志の調和密着を図るには、どんなに胸糞が悪くとも、白人は白人同志、つまり、似た者同志の間に相手を探すべきであるという(ロレンスもひょっとしたら無意識であったかも知れない、あるいは、がえんじたくなかったかもしれない)教訓を発見するのである。それを裏付けるように、ロレンス、中だるみにあって、白人と褐色人種の間、人間充足・調和密着の極意を見つけようとしているのである。白人は、いずれも、白人仲間に愛想をつかして家出した女である。(流れついた所がメキシコなのは、ロレンスがメキシコに縁があった以上、しよのないことである。が、これはひょっとしたら、メキシコ以外、利用価値のあるところは少いのではあるまいか。)女は、断片仲間だ。牢固とした意識の殻をかぶった存在だ。それが、いまなお古代の風が吹くメキシコへ来

て、この地の霊の化身みたいな、未分化で、竜の如き libido をもつ男と出合う。——というパタン——ロレンスも苦勞しているわけである。この工夫は、とにかく、初期の傑作と同様、失敗した。失敗したから、後期の觀念臭の強いシエマティッシュな作品より、ずっと模糊としている。*The Plumed Serpent* は、その曖昧・重厚において、*Women in Love* に劣らない。しかも土俗の宗教の騒音がひどいためもっと神秘的で重苦しい。だから、これはほめる者からも、けなすものからも、大の字をつけて称される。曰く、大傑作、あるいは大失敗作と。

The Princess も、このパタンに属するものの一つである。ただし、これは、すでに形態学的に見たとおり、白人女とメキシコ人の溶融が失敗に終わったのみならず、メキシコの竜が死んで、白人の意識の小毒蛇が、竜と同化できなかったが故に、やはり死んでしまうという、絶望の小説である。そこへいくと、さすがに、長篇・*The Plumed Serpent* における白人女は、メキシコの竜と同化したようなしないような、つまり、意識に限界あるが故に宇宙の風を呼吸している libido への屈服があるような、ないようなところまで妥協している。これにくらべて、*The Princess* はもっと、判然、不幸である。したがって作品は、表面上俗受けする形になった。

(なお、この作品が書かれた時、ロレンスは、Dorothy Brett と Frieda にはさまれ、こずかれ、血みどろになっていたから、復讐的気分もあって、作品の中で Romero に Princess をさいなませ、かつ、女は恐しいと骨身にこたえていたから、Romero を敗北させたのだ——などとは言うまい。そんなことは、あるかもしれないが、筆者の太陽神経叢が、むずともしないから、言うまい。

また、*The Princess* は、女性優位の小説だなどという言及も、筆者としては、したくない。ロレンスの小説には、一見、男性優位を唱えているように見えるそれ(例えば *The Fox* 等)と、女性優位を叫んでいるらしいそれとがあることはある。しかし、そういう指摘は何の意味もないのだ。男が勝っても、女が勝っても、悲劇は悲劇であり、例えば *Chatterley* に於ける Mellors と Connie の如く男女が調和密着して充足し得ぬ限り、ロレンスとしては浮かばれないのである。人間、勝てばいいなどというものではない。勝った方も、相手が負けて退いたことにより、生命の更新が果たされずやはり亡びる——ということをロレンスは知り過ぎるほど知っていたのであった。

なお、この小論、ロレンス連山の中だるみを中だるみとせず調べているうちに、貴賤貧富など意に介さぬ内面的貴族主義者ロレンスに、一種民族主義と言えるような要素が、一沫、発見されたことを、*The Princess* を借りて述べた結果になったふしも亦あるようである。)

[昭和 43 年 12 月 25 日]